英語の会話におけるイントネーションの役割

澤村 香代子

1. 序論

英語のイントネーション（以下：イントネーション）の重要性は以前から認められてきたとはいるが、イントネーション研究のアプローチは研究者によって分かれている。

イギリスにおける伝統的な研究では、心的態度機能が重要視されてきた。これは、話者と聞き手とのやりとりの中で、心的態度が知覚されやすいものだからである。O'Connor and Arnold (1973) はこの機能を重要視しており、音調の種類を細かく分け、分けた音調それぞれについて文タイプごとに考察し、心的態度を明示している。Pike (1945) や Crystal (1969) もこの機能を重要視している。

2. Tench の理論

Tench (1996) は Halliday (1967) のアプローチをもとにさらに研究を進め
た。トナリティ、トニシティ、トーンズが発話の意味にどのように関わっ
ているのかということを述べ、トーンズでは話者と聞き手の関係性を表す
音調として下降調と上昇調をあげた。下降調は話者主体の音調であり、上
昇調は聞き手主体の音調であるというものである。この話者主体の音調を
dominance（以下：ドミナランス）とし、聞き手主体の音調を deference（以
下：デファランス）とした。以下で Tench (1996) の理論を紹介する。

2.1 音調群

音調群 (intonation unit) とは前頭部 (pre-head), 頭部 (head), 核 (tonic,
nucleus), 尾部 (tail) から成る。前頭部は発話の最初の無強勢音節をいう。
頭部は発話の最初に位置する強勢音節のことをいう。核は強勢音節とと
にも音調の変化が起こる音節のことで、尾部は核に続く音節のことをいう。
発話によっては、前頭部、頭部、尾部はないこともある1。

尚、音調群は、ポーズで区切られたり、多くが文や節と一致したりする
ため、境界を知ることは比較的容易ではあるが、くだけた、速い発話では
その境界を知ることは難しい。そうした場合には、発話の内容を手がかりに見つけることもある。

2.2 トナリティによる情報の操作

トナリティは音調群の境界を設定する働きがある。Tench は音調群のことをイントネーション単位 (intonation unit) と呼んでいる。以下では音調群のことをイントネーション単位と呼ぶことにする。イントネーション単位が多くある発話は、話者が情報を多く伝えたい場合であり、少ない場合には話者の伝えたい情報が少ないことができる。通常、1つのイントネーション単位の中に1つの情報が含まれているとされ、多くのイントネーション単位は文レベルの節と一致するとされている。一致するものをニュートラルトナリティ (neutral tonality) といい、一致しないものをマークトナリティ (marked tonality) という。また、トナリティによって発話の意味が変わってしまうこともある。次の発話をみてみる。

(1a) The man and the woman dressed in black | (then stood up)  
(1b) The man | and the woman dressed in black | (then stood up)  
(1c) The man and the woman | dressed in black | (then stood up)  

(Tench, 1996: 41)

3つの発話は同じ語順であるが、トナリティによって3通りの発話となっている。(1a) は「黒い洋服を着たその男の人と女の人が（他の人は黒い服を着ていない）」という意味で、(1b), (1c) は2つのイントネーション単位からなるが、(1b) は「その男の人と、黒い洋服を着た女の人が（男の人のは呼ばれない）」となり、(1c) の発話は「その男の人と女の人、黒い洋服を着ていたのだけ」といったような意味になる。このようにトナリティによって情報が操作され、同じ語順の発話でも意味の違いがもたらされることもある。
2.3 トニシティによる情報の操作

トニシティは核をどこにするかということにより発話のポイントを示すものである。核は通常、イントネーション単位の最後のレキシカルアイテム (lexical item) \textsuperscript{iv} に置かれる。これをニュートラルトニシティ \textsuperscript{v} というが、最後のレキシカルアイテムに核が置かれないものをマークトニシティ \textsuperscript{vi} という。話者は、発話のどの部分を特に伝えたいのかということにより、核の位置を決定している。次々の発話をみてみる。

(2a) I have been asking for ages
(2b) \textit{I have} been asking for ages
(2c) I have \textit{been} asking for ages \hspace{1cm} (Tench, 1996: 61)

(2a) はニュートラルトニシティで、意味は「私は年齢を説いていたんです」となる。このとき、この発話はまったく新しい、新情報である可能性が高い。(2b), (2c) はともにグラマティカルアイテム \textsuperscript{vii} に核が置かれたマーケットニシティである。こうした場合、核以外の情報は既に話題になっただけ情報であることが多い。(2b) は \textit{haven't} ではなく \textit{have} であると言いたいために \textit{have} に核が置かれたもので、意味は、「私は年齢を（訳かなかったのがなく）説いていたんです」となる。年齢については既に話題になった上で、説いたのか、訳かなかったのかということを話者は伝えようとしている発話であることがわかる。(2c) は \textit{been} に核を置くことによって時制を強調した発話になっている。意味は、「私は年齢を（今ではなく過去において）説いていたんです」となる。年齢を説いたことは既に話題になった上で、いつ説いたのかを伝えようとした発話になっている。このように、話者は核の場所を変えることによって、情報の操作をする。
2.4 トーンズによって表される情報

トーンズはどういう音調を使うのかということである。Tench (1996) は音調の種類をまず大きく第一次音調と第二次音調とに分けている。第一次音調 (primary tones) は核音節で起こるもので，下降調，上昇調，下降上昇調の 3 つであるとしている。これら 3 つの音調は，発話の意味に関わるものであるとされている。それに対し，第二次音調 (secondary tones) は，音調の変化の度合いや，核音節以外（前頭部，頭部）での音調の変化であるとしている。例えば，低下降調，高下降調などは第二次音調となる。第二次音調には音調の変化の度合いを変えることによって，心的態度を示す機能があるとしている。平坦調に関してはその音調の存在を認めてはいるものの，意味は上昇調と変わらないということから，上昇調の一変種として捉えている。本稿では，第一次音調のみを扱うこととする。

Tench (1996) は第一次音調である 3 つの音調が現れる位置によって，その音調がどういう情報を示すのかということを述べている。下降調は主情報 (major information) であるとしている。上昇調は発話の途中に現れた場合には，未完 (incomplete)，発話の最後の場合には副情報 (minor information) であるとしている。下降上昇調は発話の途中で現れた場合にはテーマを目立たせ (theme highlighted)，発話の最後では含み (implication) という位置付けをしている。（[\] は下降調，[/] は上昇調，[\[] は下降上昇調を示す）

status of information

- major: \n
- minor: / (in final position)

- incomplete: / (in non-final position)

- implication: \ (in final position)

- theme highlighted: \ (non-final position)

(Tench, 1996: 86)
下降上昇調に関して、発話の最後では含みの意味があるということであるが、この含みという言葉はかなり広い意味で使用されている。Halliday (1967) はこの音調について保留 (reservation)，対照 (contrast)，聞き手に考えを求める個人の意見 (personal opinion offered for consideration)，譲歩 (concession) といった意味も含むとしている。

2.5 トーンズによって表されるドミナンス・デファランス

トーンズは情報を表すだけでなく、話者が聞き手に対して、何かを述べているのか、話しているのか、依頼しているのかというようなことも表している。下降調は話者が何かを知っている時や、何かを述べている時や、自分の感じたことを話す時に使われる。上昇調は話者が知らない、確信がないので聞きたい場合に使用される音調である。この際、話者は聞き手に対して何らかの決定を下している時で、聞き手主体の音調であるといえる。それに対して下降調は話者主体の音調であるといえる。このようなことから、Tench (1996) は下降調を支配、優位、話者主体を示すドミナンス (dominance) の音調、上昇調を服従、敬意、聞き手主体を示すデファランス (deference) の音調であるとした。

3. 分析・解釈

3.1 分析・解釈の方法

分析する音声はイギリス英会話の教材からとったものを使用する。分析する会話は、1〜2 分程度のもので、会話の種類はインタビュー、議論、道を尋ねるもの、友人同士の会話の 4 つである。分析の手順としては、上記で述べた Tench (1996) の理論に沿い、トナリティ、トニシティ、トーンズを中心とする。2.1 に従って音調群の境界を定め、核の位置を見つけ、その
核音節で音調が下降か、上昇か、下降上昇かを聴き取る。音調に関しては、意味の違いが明確である第一次音調までの分析にとどめておく。平坦調が現れた場合には、[]の記号を使用し、上昇調の一変種として解釈することとする。また核音節以外で音調変化が現れた場合には、記録として音調の記号を該当の音節の前に記しておき、アンダーラインは引かずに核音節と区別する。分析後、現れた現象に関してTench (1996)の理論に沿って解釈をし、会話の中で話者がどのように情報の処理をしているのかを見ていきたい。分析結果は資料として最後に添付しておく。

3.2 解釈

ここでは分析結果をもとに、解釈をしていく。それぞれの会話において、とくにイントネーションによる情報の操作が見られたところの解釈を示す。解釈しきれなかったものについても最後に示しておく。

3.2.1 インタビュー

この会話は図書館員にインタビューしているものである。以下に、一部解釈したものを示す。

I: | And have you been based / here | all that / time? |
L: | You mean did I have my \ glory days | at some metropolitan \ super-
   library? | \ Sorry, no. | I've been here in this little local library for all that
   \ time. | I started / here, | and no / doubt | I shall \ finish here. |

まずインタビューが「ここで、ずっと働いているのですか。」と質問し、図書館員が答えているところである。図書館員がSorry, no. や I've been here in this little local library for all that time. や I shall finish here. を下降調で発話していることから、断定的な、ドミナンスの発話をしていることがわかる。
インタビュアーはまず、「Though I am sure to many people で many に核を置き、下降上昇調で発話している。発話の途中での下降上昇調であることから、「多くの人は」というテーマを示したものと考えられる。後半の 3 つのイントネーション単位では列挙が見られた。それに対して図書館員は、Maybe it is など 2 つのイントネーション単位で発話している。Maybe it is を下降調で発話し、インタビュアーの意見を認め、like that in a large library の large に核を置き、下降上昇調で発話することで含みを持たせている。「大きな図書館ではそうでしょう（でもここは違うのよ）」といった意味になるだろう。その後の But you see, in a small library では small に核が置かれており、前のイントネーション単位での large と対になっているものと思われる。その後の音調はほとんどが下降調であり、図書館員が自分主体のドミナントの発話をしている。最後から 2 つ目の And also, での下降上昇調は発話の途中であるため、テーマであろう。

この会話はインタビューであるため、知らない人同士によるものであつた。この中で、インタビューを受ける側の図書館員にはドミナントの発話が多くあった。言葉からも怒っているような発言や、自分が小さな図書館で働いていることに誇りをもっている発言があった。また、トビシティに
より、図書館の大きさに焦点が当てられるところもいくつかあり、図書館の大きさを意識していることがうかがえた。

3.2.2 議論

この会話は友人同士が言い合いをしているものである。一部解釈したところを見ていく。

A: | That’s not what you said last / month? | \ You said, | and I / quote. | that you were “coming along at a \ roaring pace”. |
B: | Surely not! | I don’t remember / that. |
A: | Well \ I do. | Quite \ clearly. |

初めのAの発話での2つ目のイントネーション単位ではYouに核が置かれ、下降上昇調で発話されていた。Youを際立たせ、下降上昇調を使用することでテーマを示し、「(まぎれもなく)あなたが言ったのは」といった内容を伝えているものと思われる。それに対し、BはSurely not!を下降調で発話し、ドミナントとなっている。その後のI don't remember that.では上昇調が使用されている。ここでどう解釈するかであるが、発話の最後の上昇調は副情報ともいえるが、この発話は、前の強い否定から見ても、Aに対する反駁のディファラランスの発話と見なすのがよいだろう viii。Bの反論を受けて、AはWell I do.という発話でIに核を置き、下降上昇調で発話している。AはIを際立たせ、含みをもたせることで、「(あなたは覚えてなくても)わたしは覚えているわよ」といった内容をBに伝えている。その後「かなりはっきりとね」という発話を付け加えている。この続きが次の会話である。

B: | Well I must have been \ mistaken — then, | because I wasn’t getting much better at \ all. | I suppose I’m just bad at \ languages. |
A: You certainly are bad at keeping up with languages. “Roaringly bad.”

B: Maybe. But it’s not just me you know. / English / people are generally bad at languages.

B: It’s not an excuse. It’s a reason. It’s different. English people are bad at languages, and I’m English, so I was wasting my time trying to learn.

A: That’s rubbish. Anyone can learn if they want to. You just have to keep at it. Put some hours in. It’s no good just blaming it on being English.

B: Well that’s easy for you to say. What languages do you speak?

A: None actually. But that’s not the point. We’re talking about
話者 B の「イギリス人は語学が苦手なのさ。そして僕はイギリス人なんだ。だから僕は語学を習おうとして時間を無駄にしていたんだよ。」という発言に対して、話者 A は Anyone に核を置き、下降調で Anyone can learn if they want to. を発話した。Anyone を際立たせて、「(イギリス人でも) 誰でも、やりたければ習えるわよ」という意味の発言をしている。その後のイントネーション単位で「続けなければならないわ」、「何時間かやるのよ」ドミナンスの発話を続け、最後に含みの下降上昇調を使用していた。これは Halliday (1967) のいう聞き手に考えを求める個人的意見という意味であると解釈できる。この A の発言を受けて、B は you に核を置いて Well that's easy for you to say. と発言した。話者 B は you を際立たせることにより、その発話に、「君が言うのは簡単だろうさ（僕じゃないんだから）」といった意味を持たせている。そして、「じゃあ君は、どの言葉を話すのさ」と A に訊いている。それに対して A は最後に I didn't say I was trying to learn. の 2 つ目の I に核を置いて下降上昇調で発話した。この場合の下降上昇調はここを際立たせることにより、「わたしは（あなたと違って）習おうなんていてないわ」という意味の発言をしている。ここでの発話の多くは下降調であった。A も B もドミナンスの発話をすることで、自分の考えを言い合っていた。

この会話では、全体的にマークトンミシティが多く、話者は自分の伝えたい情報に焦点を当てていた。音調に関しては、下降調が多く、自分を主体として話す、ドミナンスの発話がお互いに多く見られた。

3.2.3 道を尋ねる

この会話は、通りがかりの人に、博物館までの道のりを尋ねる、知らない人同士の会話である。
A: | Excuse me. | I wonder if you could tell me how to get to the museum, please. |
B: | I might be able to. | It depends which museum you want to go to? |

A の初めのイントネーション単位での下降上昇調は相手の注意を引くための含みの一種であるといわれているものである。『博物館を探している』という A に対して、B は I might be able to の might に核を置き、下降上昇調で発話している。B は、might に核を置くことで、「多分」ということを強調し、さらに下降上昇調を使うことによって含みをもたせている。「多分できると思いますが（でも…）。」といった意味になるだろう。そして、その理由となるであろう、次の「どの博物館かによりますね。あなたの行きたいのが。」という発話につながっている。

B: | There's at least three that I know of. | Err. There's the local museum, there's Castle Museum, of course, and there's another one, the Trinity Lane Museum. I think. |

A が「博物館はいくつもあるのですか。」という質問に対しての答えの発話で、There's at least three that I know of を 2 つのイントネーション単位で発話しているものである。「少なくとも 3 つあるんです」ということと、「私の知っている限りでは」という 2 つの情報を伝えている。There's at least three では、three に核があり下降調で発話している。この場合の下降調は主情報と捉えてよいだろう。その次の that I know of では I に核があり、下降上昇調の発話になっている。I に核を置き、下降上昇調で話すことで、「私の知る限りでは（他の人は知らないが）…」といった意味を持たせているものと解釈できる。次の 2 つのイントネーション単位では history, Castle それぞれに下降上昇調が現れている。これらの下降上昇調は対照であると考えられる。
英語の会話におけるイントネーションの役割

A: Ah. I think it's the Castle Museum that I'm looking for.
B: \textbf{Hmm.} That's a bit difficult from here. \textbf{The Castle.} / \textbf{OK.}
\textbf{Right} do you know where the London Hotel is?
A: I'm \textbf{sorry}, I \textbf{don't}. I don't know anything here at all.
B: I / \textbf{see}. \ All right then. You see that road leading up \textbf{there}?/
A: \textbf{Yes}.

Aの「わたしが探しているのは Castle Museum です。」という発話を受けBが発話している場面である。ここで、Bは That's a bit difficult from here.の difficult に焦点を当て「ここからだと少し難しいですね。」と言った後、The Castle., OK., Right の 3つのイントネーション単位を下降調、上昇調、下降調と交互に発話している。このことにより、Bが、The Castle では「城」ということを自分の中で確認し、OKではまだ考えをまとめており、Rightで考えがまとまったのだと解釈できる。考えがまとまり、「London Hotelの場所は知っていますか。」とAに訊いている。それに対するAの答えは4つのイントネーション単位から成り、すべて下降調である。I'm sorry, I don't.を2つのイントネーション単位で発話することで、謝罪の意と、知らないという2つの情報をBに伝えているものと解釈できる。その後、I don't know anything here at all. を2つのイントネーション単位で発話している。2つの情報として発話することで、Bに対し、この辺の地理についてまったく知らないということを述べている。この発話を受けて、Bが I see. を上昇調で発話している。これも前の発話の OK と同様に考えをまとめているところであると解釈できる。All right then. で考えがまとまったものと見てよいだろう。You see that road leading up there? では there で下降上昇調を使用している。ここは、前に述べた、Halliday (1967) の下降上昇調の意味の 1つである議論であると解釈できる。Aの「この辺のことは何も知らないんです。」という発言に対して、「これならわかるだろう」という議論したかたちの発話であると解釈できる。「(じゃあ) あそこの坂になった道ならわかりますか。」といった意味になるだろう。それに対して A が続きを促す
ファランスで Yes. と発話している。
この後の発話では，A が続きを促すデファランスの発話以外，すべて下降調で発話されていた。最後の A の発話は次のようなもので，マークトトニシティであった。

A: | You were a \ great help. | Thank you \ very much. |

A は great と very に焦点を移すことにより，B に対して深い感謝の意を表しているのだと解釈できるよう。

3.2.4 友人同士の会話

この会話は，話者 A がリラックスできる公園がないか話者 B に尋ねるものである。友人同士の会話である。

J: | / Relax? | Just lie on the - grass, | read a - book, | maybe have a small / picnic, | maybe a bottle of / beer, | \ Nothing \ special. |
A: | Ah, \ OK then. | I know just the \ place. | “Forest Green \ Park”. | It has a miniature / lake, | a big open grassy - area, | and \ trees for shade. |
   | It’s very \ nice. |
J: | It \ sounds nice. | Where \ is it? | How do I \ get there? |

リラックスできる公園を探している J に，A が「どんなふうにリラックスしたいの。」と訊いたことに対する J の発話で，Just lie on the grass, read a book, maybe have a small picnic, maybe a bottle of beer. を 4 つのイントネーション単位で発話し，grass, book を平坦調で，picnic, beer を上昇調で発話している。平坦調は上昇調の一変種であると考えると，この発話は列挙であると考えることができる。最後の beer は後に，発話が続いていることから，未完の上昇調であると解釈できる。この発話に対する A の答えでも，It has
英語の会話におけるイントネーションの役割 41

a miniature lake, a big open grassy area, and trees for shade. で平坦調と上昇調の列挙が見られた。これは 3 つのイントネーション単位から成り、lake に上昇調、area に平坦調、tree に下降調が生じている。これらの tree はマークトトニシティであるが、この会話が公園でリラックスするというトピックであるため、木といえば日陰ということが当たり前のようになっていることから tree に核が置かれたものであると解釈できる。これに対し、It sounds nice. を sounds に核を置いて下降上昇調で発話している。「それはようそうだね。(でも…)」というように含みのある発話になっている。その後、公園の場所や行き方を説く発話につながっている。

4. 結論

今回、会話を分析し、話者同士のやりとりの中でイントネーションの現象を見ながら解釈してきた。

トナリティに関しては、話者が相手に情報を一つひととわかりやすく伝えるためにイントネーション単位を区切り、伝えたい情報を処理していた。列挙の発話の時には、イントネーション単位を列挙される項目ごとに細かく分け、情報をわかりやすくしていた。また、情報の新旧にも関わることがあり、1 つのイントネーション単位の中に 2 つ以上の節があるマークトトナリティでは、1 つの節が新情報であり、あとの節は旧情報であった。これは、通常、1 つのイントネーション単位に 1 つの情報が含まれるという Tenc (1996) の理論のとおりであり、伝えたい情報を分けることにトナリティが関わっているということがわかった。

トニシティは、イントネーション単位内での情報の処理に深く関わっていた。どの会話でも会話が進むにつれてマークトトニシティが増えた。これは会話が進むことで旧情報が増えたことが原因であろう。また、インタビューでの図書館員の発話のように、一定の長さの会話の中で、話者がどのようなことを意識して発話しているのかということが、トニシティによ
ってわかる例もあった。
トーンズにおいては、ドミナンス、デファランスの音調がよく現れた。
特に、議論では、ドミナンスと解釈できる音調が多くあった。
お互いの意見を言い合う場面が中心であるためであろう。
また、道を説ねる会話や、友人同士の会話では、内容が、道順に関するものであったため、主情報としての下降調が多く見られた。
会話の中で、イントネーションは話者が伝えたい情報を処理するという大切な役割があるということがわかった。
さらに、トーンズは話者間のやりとりの中では、含みを持たせたり、ドミナンスやデファランスなどの意思伝達に関してとても重要な役割を担っているということがわかった。
今回の分析では、平坦調が多く見られた。この平坦調に関しては、Tench (1996) では上昇調と文法的な意味の違いはないとして、本稿においても上昇調の一変種であるとしていたが、今回の分析ではかなり多くの平坦調が現れていた。
Roach (2000) は音調の種類を下降調、上昇調、下降上昇調、平坦調、上昇下降調の5つとしている。
ただ、Tench (1996) の場合には文法的意味の違いがあるということに基づいて音調の種類を決定しているが、Roach は心的態度も考慮に入れているということで音調を分ける方法が異なっている。
Roach (2000) の挙げた5つの音調は、未だ体系付けられていない心的態度を考慮に入れている分、微妙な部分があるといえる。しかし、今回の解釈の際に上昇調と捉えて問題はなかったが、実際に多くの平坦調が確認された。
今後、心的態度に関する音調の体系化が進んだ際には、平坦調も独立した音調として捉えられるかもしれない。また、発話の最後の下降上昇調に関しては、含みといったものかなり広い意味があり、解釈の際にも困難なことがあった。Halliday (1967) が含みの中に入れている、保留、対照、聞き手に考えを求める個人的意見、譲歩という意味は含みとひとことでいうには広すぎるように思える。
この下降上昇調という現象に関しても、今後あらたなアプローチや、意味付けがなされるのではないだろうか。
英語の会話におけるイントネーションの役割 43

注

i Tench は音調群について次の 4 つの発話例をもとに表で説明している。下線は核音節を、単語の左についている ['] は強勢を、[] は音調群の境界を示している。

1. A [dog is a] man's [best] friend
2. Dogs are [men's] best [friends]
3. Dogs are [men's] best [friends]
4. yes [they] are [aren't] they

<table>
<thead>
<tr>
<th>pre-head</th>
<th>head</th>
<th>tonic/ nucleus</th>
<th>tail</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>1</td>
<td>A</td>
<td>dog is a</td>
<td>friend</td>
</tr>
<tr>
<td>2</td>
<td>Dogs are</td>
<td>men's best</td>
<td>friends</td>
</tr>
<tr>
<td>3</td>
<td></td>
<td>Dogs</td>
<td>men's best friends</td>
</tr>
<tr>
<td>4-1</td>
<td>yes</td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>4-2</td>
<td>they</td>
<td>are</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>4-3</td>
<td></td>
<td>aren't</td>
<td>they</td>
</tr>
</tbody>
</table>

(Tench, 1996: 14)

ii ニュートラルトナリティのニュートラル (neutral) という言葉はここでは「普通」のという意味で使用している。マークト (marked) と対立する言葉である。トニシティでも同様。

iii マークト (marked) とは「有標」のことである。本稿ではニュートラルと対立させて使用している。トニシティでも同様。

iv レキシカルアイテム (lexical item) は「語彙項目」のことをいうが、Halliday (1967) は語彙項目について yesterday/today/tonight 等を語彙項目には含めず、文法的アイテム (grammatical item), つまり「文法項目」に含めている。しかし、yesterday/ today/ tonight 等は普通 lexical item に含まれるものである。ここでは yesterday/today/tonight 等は文法的アイテムに含めることにする。そのため、本稿では語彙項目という訳語を使用せずに、カタカナ表記を使用することとする。

v 注 ii 参照。

vi 注 iii 参照。

vii 注 iv でも触れているが、ここでは yesterday/today/tonight 等が文法的アイテムに含まれるため、一般的な文法項目と区別するためにカタカナ表記を使用している。

viii Tench (1996) は、反駁を次の発話を例に説明している。
Oh no! I didn’t (Tench, 1996: 93)
この発話では「わたしは（そんなこと）してませんよ」といった意味になり、
聞き手に訴えかける発話になっている。相手に考え直してほしいという願い
が含まれた発話なので、デフォラントであるといえるとしている。

ix 他に，∇ Waiter や∇ Nurse，もこの種の音調である。（Tench, 1996: 104）

x Tench (1996) は日常的に使われる例として次のような発話を挙げている。
The doctor’s coming (Tench, 1996: 64)
この発話では、呼んだ医者が来るのは予測できることであるため，coming は
重要視されていないのである。

分析資料
（インタビュー）

I: | Perhaps I could \ start | with asking how long you have been \ working as a 
librarian? |
L: | Perhaps you \ could, | Let me \ see. | \ Goodness, | it must be almost \ twenty 
\ five \ \ years now. |
I: | And have you been based \ here | all that \ time? |
L: | You mean did I have my \ glory days | at some metropolitan \ super-library? |
\ Sorry, no. | I’ve been here in this little local library for all that \ time. | I started 
\ here, \ and no \ doubt | I shall \ finish here. |
I: | \ Sorry. | You sound \ proud | of your \ work? |
L: | Of \ course. |
I: | Though I am sure to \ many people | the job of librarian \ sounds | like a very 
\ tedious \ \ job. | Checking books \ out, | checking them in \ again, and then 
\ just \ \ shelving them again. |
L: | Maybe it \ is | like that in a \ large library. | But you see, in a \ small library like 
this \ we have very \ limited staff, | so \ everyone gets involved in \ all aspects | of 
running the \ library. | That can be \ very interesting. | And \ also, | we get to 
\ know people. |
I: | / Perhaps | you could tell me something about the day to day \ running of a 
library? | What has been the most \ interesting for you? |
L: | / Hmm. | Well it is difficult to put your \ finger on | just one, \ single point. |
\ But I \ would say | that the \ book choosing is | what I’ve \ enjoyed the most. |
I: | The \ book choosing? |
L: | That’s \ right. | You see, a \ small library like this | only has a very limited
I: | Could you \ expand on that a little? |
L: | I could. | You \ see, | I personally have a \ strong dislike for censorship, | for \ banning books. | But you \ see, | every time you \ don’t buy a book, | you are in \ effect, | performing a kind of \ censorship. | For \ example, | in \ our library, | although we have no policy \ against \ it, | we have no \ erotica \ in \ a \ whole \ collection. | \ Strange, | don’t you \ think? |
I: | I suppose you have to consider your reader’s \ preferences. |
L: | We \ do, \ of \ course. | But then, for \ many people, | what books a library \ holds, \ very much influences peoples’ \ choices. | Of course, it’s \ changing now. | Books are so much more \ available these days. | But the \ public library \ still has a \ very \ powerful \ effect \ on people’s \ reading. |

（談話）
A: | Are you still taking \ French \ at \ Evening Class? |
B: | \ No, \ I gave \ up. |
A: | Whatever \ for? | You were so \ keen before. |
B: | \ I know, \ but I had to miss a couple of \ classes \ and after you \ miss, \ it’s so difficult to go \ back. | And \ anyway, \ I wasn’t getting any \ better, \ so it was all \ a bit of a waste of \ time. |
A: | That’s not what you said last \ month? | \ You said, \ and I \ quote, \ that you were “coming along at a \ roaring pace”. |
B: | \ Surely not! \ I don’t remember \ that. |
A: | Well \ I do. | Quite \ clearly. |
B: | Well I must have been \ mistaken – then, \ because I wasn’t getting much better at \ all. | I suppose I’m just bad at \ languages. |
A: | You certainly are bad at keeping \ up with languages. | “\ Roaringly bad”. |
B: | \ Maybe. \ But it’s not just \ me \ you know. | \ English / people are / generally \ bad at \ languages. |
A: | You mean English people are bad at keeping \ up with languages. | But I \ know \ what you mean. | I – \ mean, \ it \ must be a cultural thing. | It’s nothing \ genetic. | It’s not any kind of in-born \ inability. |
B: | \ No, \ I suppose \ not. \ But you would almost think it \ was, \ looking at how \ bad people are. | I – \ mean, \ do you \ know \ anyone \ who is \ good at languages? |
A: Actually, \textbf{yes}. I \textbf{do} know \textbf{a \ few people.}
B: You mean \textbf{only} a few people.
A: \textbf{Perhaps.} But I \textbf{don't see} how this becomes an excuse for you giving up \textbf{French.}
B: It's not an \textbf{excuse}, it's a \textbf{reason}. It's \textbf{different}. \textbf{English} / people are \textbf{bad at} \textbf{languages}, and I'm \textbf{English}, so I was wasting my \textbf{time} trying to \textbf{learn}.
A: That's \textbf{rubbish}. \textbf{Anyone} can learn if they want to. You just have to keep \textbf{at} it. Put some \textbf{hours} in. It's \textbf{no good} just \textbf{blaming} it on being \textbf{English}.
B: Well that's easy for \textbf{you} to say. What languages do you \textbf{speak}?
A: None actually. But that's not the \textbf{point}. We're talking about your \textbf{French}. I didn't say \textbf{I was trying to learn.}

(道を訊ねる)
A: \textbf{Excuse} me. I wonder if you could tell me how to get to the \textbf{museum}, please?
B: I \textbf{might} be able to. It depends which \textbf{museum} you want \textbf{go to}?
A: There's more than \textbf{one}?
B: There's at least \textbf{three} that I know of. Err. There's the local \textbf{history} museum, there's the \textbf{Castle Museum}, of course, and there's another one, the Trinity \textbf{Lane Museum}, I \textbf{think}.
A: Ah. I think it's the \textbf{Castle Museum} that I'm looking for.
B: \textbf{Hmm}. That's a bit \textbf{difficult} from here. The \textbf{Castle}. \textbf{OK}.
B: \textbf{Right} do you know where the London \textbf{Hotel} is?
A: I'm \textbf{sorry}, I \textbf{don't}. I don't know \textbf{anything} here at \textbf{all}.
B: I \textbf{see}. \textbf{All} right then. You see that road leading up \textbf{there}?
A: \textbf{Yes}.
B: \textbf{Follow} that until you get to the top of the \textbf{hill}, and you'll see a large \textbf{department store}.
A: \textbf{OK}.
B: That gets you close to the \textbf{Castle}, but it's a bit \textbf{complicated} after that. I think it's probably best if you ask \textbf{again} at the \textbf{department store}.
A: \textbf{Oh}, I \textbf{see}. I'll \textbf{try} that. \textbf{Thank} you.
B: That's \textbf{OK}. Sorry I couldn't be more \textbf{help}.
A: You were a \textbf{great} help. Thank you \textbf{very} much.
James: I want to find a nice park, somewhere not too far away. Somewhere where I can be quiet, and relax. Do you have any ideas?

Alex: Well, what kind of thing are you looking for? How do you like to relax?

J: / Relax? Just lie on the grass, read a book, maybe have a small picnic, maybe a bottle of beer. Nothing special.

A: Ah, OK then. I know just the place. "Forest Green Park". It has a miniature lake, a big open grassy area, and trees for shade. It's very nice.

J: It sounds nice. Where is it? How do I get there?

A: OK. It takes about twenty minutes from Central Station. You get off at Forest Green Park Station. That's easy to remember. You go out onto the main street, turn left, and follow the road for about five minutes. You'll pass a fire station on your left, and a school on your right, and you'll find the south gate to the park just after the school. Oh, and you can buy a packed lunch or sandwiches at a bakery just opposite the Park gate. So you don't need to take your own picnic.

J: OK. It sounds easy to find.

A: It is. Very easy. Especially if I go with you.

參考文献

(Peter G. and Robins, 1994. "British English Intonation". South East Asia.)


小林章夫, ドミニク・チータム (2001). 『イギリス英会話を愉しく学ぶ』. ベレ出版.